

第3章 美郷町の歴史文化の特性

第1節 美郷町の歴史文化の基軸と特性

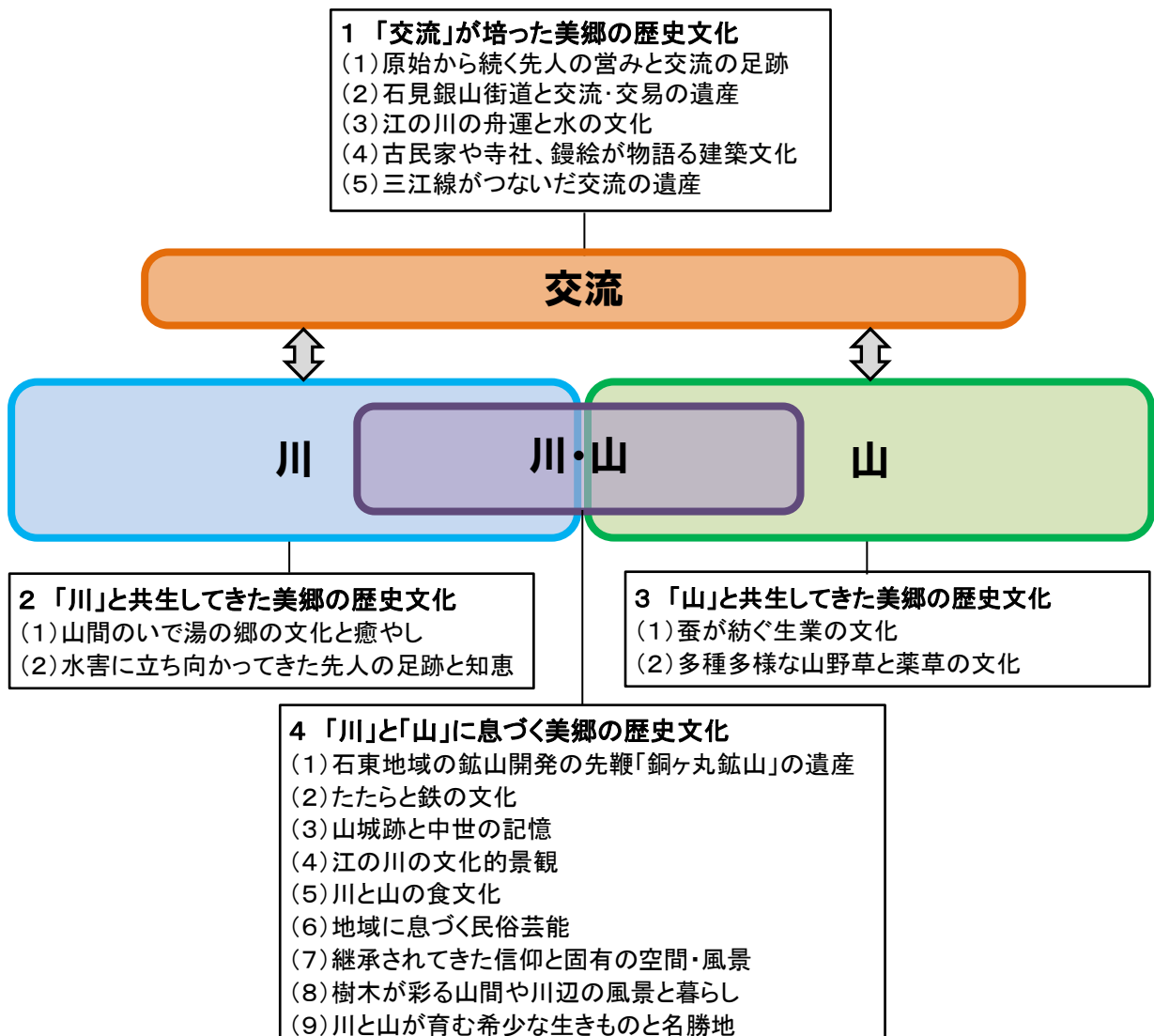
美郷町の歴史文化の特性を、それが形づくられた時代や周辺環境を含めて、分野により整理すると、18の個別の特性を取り上げることができる。

これらの特性を形づくった背景にあるのは、資源としての「川」と「山」、行為としての「交流」と捉えることができる。これら3つ（基軸）は、いずれのテーマにも関係するが、特につながりが強いものを取り上げ、大きく次の4つに区分して特性を整理する。

- 1 「交流」が培った美郷の歴史文化
- 2 「川」と共生してきた美郷の歴史文化
- 3 「山」と共生してきた美郷の歴史文化
- 4 「川」と「山」に息づく美郷の歴史文化

なお、ここでの歴史文化とは、序章第1節「3 計画の対象」で示しているように「現代まで伝えられてきた知恵・経験・活動等の成果及びそれらが存在する環境」であり、現代において存在するモノ・コト（指定・未指定、有形・無形の文化財とその周辺環境）ということになる。

【美郷町の歴史文化の基軸と特性（項目）】



第2節 美郷町の歴史文化の特性（内容）

1 「交流」が培った美郷の歴史文化

（1）原始から続く先人の営みと交流の足跡

美郷町では、縄文・弥生時代の遺跡が、江の川やその支流沿いを中心に多数確認されている。旧石器時代の遺跡は未確認であるが、隣接する邑南町ではこの時代の遺跡（横道遺跡、荒楨遺跡など）が確認されていることから、本町においても旧石器時代から人々は暮らしていたと推定される。

本町乙原に所在する沖丈遺跡（縄文時代～近世）では、主要地方道川本波多線道路改良工事に伴い、平成7年(1995)～8年(1996)に邑智町教育委員会（現・美郷町教育委員会）が発掘調査を行い、弥生時代前期の埋葬施設（配石墓群）や竪穴住居の跡を確認するとともに、多数の遺物（縄文土器、弥生土器、土師器、鉄器、玉類等）が出土している。加えて、奈良時代末～平安時代初期の竪穴住居跡、中世や近世の遺物（陶磁器など）も確認しており、長期間にわたり集落が存在していたことを示している。

また、吾郷宮の段遺跡（弥生時代、古墳時代）からは、弥生土器、土師器、須恵器と合わせて黒曜石片も出土している。黒曜石は本町では産出しておらず、西日本では隠岐（島根県）、姫島（大分県）などに限定されており、少なくとも弥生時代から広域的な交流が行われていたことになる。

上記の2つの遺跡は、本町の江の川下流部沿いの遺跡であり、近接し、かつ、弥生時代から古墳時代にかけて時代が重なっている。さらに、平坦地がある程度まとまって存在する江の川の浜原地区から下流部、都賀行地区から上流部、及び邑南町につながる支流の角谷川流域には、縄文から古墳時代の遺跡（集落）が多数立地し、相互の交流を類推させる。

このように本町においては、原始から続く人々（先人）の営み、交流の足跡を、各地に所在する遺跡や発掘された遺物から確認することができる。

（2）石見銀山街道と交流・交易の遺産

石見銀山街道は、江戸時代石見銀山で生産された灰吹銀を輸送するための輸送路で、現在の石見銀山遺跡（大田市大森町）より尾道市まで、山陰と山陽を結ぶ31.5里（約130km）の道である。

美郷町における石見銀山街道はルート全体が確認されている。そのうち「やなしお道」と森原古道は、多様な工法やその他の遺構が確認され、江戸幕府の銀輸送や交通制度を考える上で欠くことができない街道であることなどを理由に、史跡に指定されている。加えて、同時代史料（古文書）に記されている状況（街道の構造、拡幅など）を裏づける街道でもある。

また、本町においても、大森代官であった井戸平左衛門の頌徳碑や道標が、石見銀山街道沿いなどに多数残されている。なお、井戸平左衛門の頌徳碑は、大田市を中心に島根・鳥取・広島・岡山の4県において約500基が確認されている。

さらに、街道の幾つかのポイントでは、石見銀山の山々（大江高山、仙ノ山など）や三瓶山、江の川を眺望することができ、宿場町であった小原（粕淵）、街道と結節する江の川舟運の中継地であった浜原、1日目の宿泊地であった九日市の街並み・集落が往時の面影を伝えている。

加えて、「美郷町銀山街道を護る会」が組織されるなど、街道の保存・活用の取組が地域主体で行われている。

このように本町における石見銀山街道は、江戸幕府の銀輸送や交通制度など日本史を学ぶ存在であるとともに、交流・交易を通じて地域を培い、現在につながる風景や文化を育んだ郷土を学ぶ遺産でもある。

(3) 江の川の舟運と水の文化

美郷町を流れる江の川は、中国地方最大の大河であり、山地を横断する全国的にも希少な存在である。

また、江の川は、古くから陰陽を結ぶ大動脈である交易の要路とされ、「高瀬舟(帆船)」による舟運が発達していた。ただし、江戸時代は特定物資の移出入を禁止し、あるいは制限した津留が行われていたので、交易は局地的なものであった。明治維新後、津留の解除とともに舟運は急速に発達し、特に江の川は内陸交通の幹線となった。全盛期には数百隻の川舟が米、鉄、薪炭、三次の商品、江津の石州サバなどを運んでいた。舟運による交易・交流は本町を含む流域一帯の経済を支え、人々の生活文化を育んできたのである。

江の川沿いの地域には、舟運に関わる地名が各地にあり、本町においても下流部から「港」「粕渕」「浜原」「都賀」をあげることができる。その他、川に関する地名としては「乙原」(「乙」は川の蛇行)「築瀬」(「築」は魚を捕る仕掛け)「潮」がある。これらの地区では街や集落が形成され、主要な中継地であった浜原には、往時の賑わいを彷彿させる建物も残されている。

また、江の川沿いには数多くの神社がある。港地区には水の神である市杵島姫命いちきしまひめを祭神とする巖島神社(宮島の巖島本社が総本社)があり、浜原地区の桂根八幡宮、潮地区の美保神社も水の神と関わりがあり、舟運の安全と地域の発展に関係するものと考えられる。

しかし、この舟運も1930年代には堰建設や鉄道・道路交通の発達により終わりを告げることとなる。

一方で、江の川や舟運の歴史は、本町のカヌーの振興にもつながり、美郷町カヌー博物館にも受け継がれている。さらに、これらの取り組みはバリ島マス村との交流へと発展し、バリ島にある村と交流する唯一の自治体として全国的の注目を集めつつある。

このように本町においては、江の川の舟運の歴史を、江の川そのものや川沿いの街などを通じて体感できるとともに、地名や新たなまちづくり(カヌー・バリ文化)によっても継承している。

(4) 古民家や寺社、鏝絵が物語る建築文化

粕渕、浜原、沢谷、潮をはじめ美郷町の各所に、伝統的建造物や鏝絵が残されている。

粕渕は、かつては宿場町「小原宿」として発展した所で、伝統的建造物が並ぶ寺小路や、幕末に本陣を務めた佇まいや庭園を残す亀遊亭、重厚な造りの古民家などが残され、風情ある景色が残る。

浜原は、かつて江の川舟運の中継地であり、江戸時代の初めには浜原口番所が設けられた地であり、石見銀山街道も通っていた。その繁栄を物語る古民家や寺社の建造物が残されている。

沢谷にも石見銀山街道が通り、九日市宿(本陣)や酒谷口番所があった地域であり、現在、本陣であった建物はないがその跡が残る。また、街道沿いには古民家を活用した「ふ

るさとおおち伝承館」があり、屋根（当初は石屋根、現在は改修）や間取りは江戸時代の面影を残し、敷地内のシダレザクラの大木（前川ザクラ：町指定文化財）は、街道に桜のトンネルを形づくる。

潮は江の川沿いに集落が形成された所であり、塩分のある泉質の温泉があり、その名がついた。江の川に面して江戸時代後期に建築された中原家住宅があり、日本画家中原芳煙（明治8年(1875)－大正4年(1915)）の生家でもある。

また、各所に石州左官の技量を示す鰻絵のある建物があり、一部は切り取って保存している。役場1階では、鳳凰と鍾馗の鰻絵を展示している。鰻絵は石州左官の技量の高さを象徴するものであり、その中心地といわれる馬路（大田市仁摩町）などとの人や技術の移動・交流も類推される。

このように、街道沿いやかつての宿場町、舟運の中継地などには、伝統的建造物や鰻絵が残され、それらを通じて半世紀～1世紀以上前のこの地の繁栄や営み、職人の技術・技能をうかがい知ることができる。

（5）三江線がつないだ交流の遺産

三江線さんこうせんは、江津市（江津駅）と三次市（三次駅）を結んでいた鉄道路線であり、平成30年(2018)3月31日をもって旅客営業を終了し、翌4月1日付で全線廃止となった。

起工は大正15年(1926)であり、そのおよそ5年後の昭和5年(1930)に、石見江津駅（現在の江津駅）～川戸駅（江津市桜江町）間が開業した。なお、全通は昭和50年(1975)までかかっているが、その間、昭和43年(1968)に国鉄諮問委員会が提出した意見書「赤字83線」には三江北線、三江南線とも入っていた。

鉄道が美郷町に到達したのは、昭和10年(1935)であり、石見川本駅～石見築瀬駅間の延伸開業である。昭和12年(1937)には浜原駅まで伸び、粕淵駅・浜原駅が開業した。しかし、戦時体制下において延伸工事は中断した。その後、昭和30年(1955)に三次駅～式敷駅間の三江南線が開業し、江津駅から浜原駅までの区間は三江北線となった。両者がつながり全通するのは、浜原駅～口羽駅間が延伸開業した昭和50年(1975)となる。

この路線は、古くから舟運に利用されていた江の川沿いを中心に敷設されているが、本町の浜原ダム付近では、ダムを迂回するため山地部に入り、沢谷駅が設置された。

廃線となった現在、線路等の一部は撤去されているが、鉄橋やトンネル、駅などの跡の多くは、江の川や街並み、田園、山々の風景と一体となった、あるいはそれらの中に埋もれつつある近代化遺産でもある。

また、粕淵駅の駅舎は美郷町商工会館との合築であり、商工会の係員が出札業務を受託していた。浜原駅の駅舎は開業当時（昭和12年(1937)）の建物であり、無人駅となっていた廃線前の平成27年(2015)から、浜原地域おこし協力隊事務所として使用されている。旧沢谷駅付近では、花壇等による修景が地域住民により行われている。

このように廃線となった三江線は、近現代のこの地や鉄道の歴史の物言わぬ証人であるとともに、三次市と江津市、中山間をつないだ人々の暮らし、舟運から引き継いだ交通の有り様を物語る存在でもある。

2 「川」と共生してきた美郷の歴史文化

(1) 山間のいで湯の郷の文化と癒やし

美郷町には、それぞれに歴史と個性を有する湯抱温泉（別府）、千原温泉（沢谷）、潮温泉（潮・曲利）と3か所あり、以前は魚切温泉（長藤）も営業していた。

湯抱温泉は、近くに江の川支流の尻無川と湯抱川が流れ、山間の緑と相まって、静寂の中で川のせせらぎ、鳥、虫の音に包まれ、冬には降り積もる雪を感じることでできる温泉地である。泉質は塩化物泉で、湯船とその周囲には、長年蓄積した温泉成分が、千枚田のように広がっている。また、万葉歌人・柿本人麻呂の終焉地が、この近くに位置する「鴨山」であると、斎藤茂吉が断言したことで、広く知られるようになった。温泉地の近くには、終焉地の探求にかけた斎藤の功績を展示する「斎藤茂吉鴨山記念館」が位置し、周辺には13基の歌碑もある。記念館の奥には鴨山公園があり、そこからは鴨山の姿を望むこともできる。

千原温泉は、県道から町道を3.5km入った谷にあり、秘湯という風情の温泉であり、令和3年(2021)には、温泉愛好者が選ぶ「ひなびた温泉」の全国ランキングで1位(100位まで選定)に選ばれた。ちなみに湯抱温泉(中村旅館)が41位となっている。泉質は炭酸水素塩泉・塩化物泉で、源泉が出る岩盤の真上に板で囲った小さな浴槽はあり、底に敷いた板の隙間から約35℃のぬるめの源泉が、炭酸ガスを伴い湧き出る。皮膚病・火傷・切り傷などに効果があるとされ、戦後、広島原爆被爆者の療養に利用され、また、昭和50年代前半までは湯治療養専門の温泉として、一般客には閉ざされていた歴史もある。

潮温泉は、江の川に面した温泉地であり、対岸一帯は江川水系県立自然公園となっており、のびやかな河川と緑の景観に包まれ、川沿いには廃線となった三江線の線路が残されている。狐が見つけたと伝わる掛け流しの天然温泉であり、泉質はナトリウム-炭酸水素塩・塩化物泉で、少し塩っぽく「潮」を表している。また、メタ珪酸(保湿成分の一つで、肌の新陳代謝を促進)が豊富で美肌の湯、杖忘れの湯とも言われている。令和3年(2021)には再整備により「石見ワイナリーホテル美郷」としてオープンしている。

最近まで営業していた魚切温泉は、江の川支流の塩谷川沿いにあり、温泉名にもなった近くの溪流が「魚切」(アユがこれより上流に上れない)の風情を伝えている。

このように本町には、山間のいで湯の郷にふさわしい特徴的な温泉が各所にあり、住民はもとより、広く温泉客が訪れ、温泉そのものや周辺の環境による癒やし、そして地域の文化的な風情を体感することができる。

(2) 水害に立ち向かってきた先人の足跡と知恵

美郷町は、江の川における舟運、漁労等を通じて恵みを享受してきた地域である一方、度々水害に見舞われるなど、災害とそれに立ち向かってきた歴史を刻み込んできたまちでもある。

特に洪水に対して先人は、堤防等の築造とともに、避難という観点を重視し、対策を積み重ねてきた。その最たる取組が寺社の位置にある。江の川沿いには数多くの集落等と合わせて寺社があるが、寺社の多くは「つからん場所」(浸水しない場所)にある。下流から寺社をあげると、乙原八幡宮、天津神社、覚法寺、定徳寺、妙用寺、桂根八幡宮、照立寺、光宅寺、小尾山神社、高善寺がある。現在の本町の「洪水ハザードマップ」でも、これらの寺社をいざというときの有効な避難の場所として、また、「つからん場所」として明記し

ている。

また、江の川と沢谷川が合流する付近に築造された堤防と竹やぶなど、少なくとも1世紀以上前と推定される水害対策の歴史や技術の証も残されている。

さらに、災害やそれに立ち向かったことを記念し、昭和47年(1972)大水害の水位標が設置されており、災害の記憶を現在そして後世に伝えているとともに、粕淵地区の江の川沿いの高台には防災公園を整備している。

このように本町は、洪水をはじめとした災害に見舞われ、立ち向かってきた歴史があり、それらを災害史等の記録とともに、江の川沿いの寺社や堤防等の治水施設、水位標などでうかがい知り、後世に伝えているまちである。

3 「山」と共生してきた美郷の歴史文化

(1) 蚕が紡ぐ生業の文化

美郷町は、かつて養蚕が農家の副業であり、貴重な収入源であった。その背景として、明治時代末から昭和時代初期にかけての繊維産業の振興があった。

この時期、県内各所で製糸工場の設置や生糸販売組合などの設立が行われた。本町を含む島根県側の江の川流域一帯は、平地部が少なく稲作での収入に限られていたことから、灌漑が必要ない桑の栽培による養蚕が、古くから行われていた。さらに、明治時代の後半には先進地の関東に学び拡大し、国内屈指の生糸産地に成長した。また、氾濫を繰り返す江の川流域の土壌は肥えており、厚く大きな桑の葉を大量に採取することができ、生糸を採る繭も大きかった。こうした養蚕業の発展の過程で、大正14年(1925)には邑智生糸販売組合江水社が設立されている。

しかし、昭和40年代に入ると、合成繊維の台頭、海外の安価な生糸の輸入から養蚕業は衰退の一途をたどり、昭和50年代には本町から養蚕業はなくなっていった。加えて、養蚕の仕事は、多くの工程があり、労力と苦労が多かったことも、継承の制約となった。

現在、本町では、かつて養蚕を行っていた農家住宅や養蚕小屋、各種の道具などが残されている。また、桑畑の跡なども、一部の場所で確認できる。

このように本町では、かつて地域経済と農家の暮らしを支えていた養蚕に関わる歴史や生業の知恵を、建造物や道具、桑畑の跡などを通じてうかがい知ることができる。

(2) 多種多様な山野草と薬草の文化

美郷町は、樹木と合わせて多種多様な山野草が息づき、そうした中から生業として薬草をつくってきた地域でもある。

自生している山野草のうち希少な植物(絶滅危惧種)としては、サンバサワアザミ、タコノアシ、サギソウ、ヒナランなどをあげることができる(『改訂しまねレッドデータブック2013』に掲載)。この他、前述の前川ザクラのある「ふるさとのおおち伝承館」には、絶滅危惧類であるオキナグサが自生している。

薬草に関しては、安政3年(1856)の「採薬稼札」が残されている。これは大森代官所から出されたもので、採薬を稼業とする者への免状である。少なくとも本町では江戸時代末期から山野草が採取され、薬草となっていたのである。そして、その歴史を継承するごとく、本町ではカワラケツメイ、シャクヤク、ドクダミが栽培・出荷され、エビスグサが試験的に栽培され、野草茶を含めたお茶の生産も行われている。

加えて、全国の生産者などが集まる「第 10 回 全国薬草シンポジウム」が、令和 4 年(2022)10 月に開催されている。

このように本町は、歴史的に山野草が採取され薬草づくりが行われてきた地域で、自然と共生する薬草の郷づくりを目指しており、その背景や歴史を各地に自生する山野草や歴史資料、そして実際に栽培・出荷されている薬草や野草茶を含めたお茶からうかがい知ることのできるまちである。

4 「川」と「山」に息づく美郷の歴史文化

(1) 石東地域の鉱山開発の先鞭「銅ヶ丸鉱山」の遺産

銅ヶ丸鉱山跡は、美郷町を流れる江の川の下流部付近、川本町との境界付近に立地し、生産と移送手段（舟運）が一体化した希有な鉱山であった。舟運によって、鉱山や製錬等で多量に使用する薪炭や食料、衣服などの搬入が行われ、一方で製錬した銅などの製品が搬出されていった。

この鉱山は永享 3 年(1431)に銅の採掘を始めたといわれ、大永 7 年(1527)に発見され、それ以後、本格的に開発された石見銀山より、1 世紀近く早いことになり、石見地域、とりわけ石東地域の鉱山開発の先鞭をなすものである。なお、石見銀山は、14 世紀初め頃に露出した自然銀を採掘したとの伝承もある。

江戸時代に入ると、幕府直轄領、いわゆる天領である石見銀山領に加えられ、同じく石見銀山領となった久喜銀山（邑南町）、笹ヶ谷鉱山などとともに、わが国有数の鉱山地帯を形成した。

明治時代に入ると銅ヶ丸鉱山は、西の足尾銅山（栃木県）といわれるほど繁栄し、明治 29 年(1896)には、ここに発電所が設置されて電灯が灯されるほど隆盛を極めていた。この時期、「中国の銅山王」と呼ばれていた堀氏が、笹ヶ谷鉱山（津和野町）などとともに銅ヶ丸鉱山も経営していた。

しかし、明治時代の終わりには銅価格が暴落して休山し、明治 42 年(1909)に失火により鉱山施設を全焼し、閉山となった。

銅ヶ丸鉱山の遺構を確認すると、江の川とその支流である田水川が合流する付近に製錬所跡があり、田水川の支流である今津川の谷沿いに採掘跡、坑口等が点在する。現在は樹木に覆われた状態であるが、これら遺構は良好に残されていると推定される。

このように銅ヶ丸遺跡は、鉱山（銅山）による本町の繁栄の歴史を伝える遺産であるとともに、埋もれている多数の遺構や記録などから、鉱山開発の産業史・技術史、江の川の舟運や浜原での石見銀山街道との関わり、堀氏や広域的な関係など調査研究のテーマを多面的に内在する存在でもある。

(2) たたらと鉄の文化

たたら（鉦又は鑪）とは製鉄場全体を指す言葉であり、本計画でのたたらは、製鉄技術を含むたたら製鉄全体のこととする。なお、たたらは踏鞴^{たたら}とも記すが、これは製鉄炉に風を送る鞴^{ふいご}自体を指すものである。

『出雲国風土記』には、出雲地方で生産される鉄が優れていると記されており、少なくともたたら製鉄は 1300 年前には行われていたことになる。

出雲地方と接する本町（石見地方）においては、数多くの製鉄遺跡が分布しているが、

専門的調査は行われていないことから、学術的には中世以前の遺跡が所在しているとはいえない。しかし、石見地方においては、製鉄に関わる遺構や遺物により、古代から鉄の生産が行われていたことが裏づけられている。本町と近接する自治体においても、古代や中世の製鉄遺跡が確認されている。

南側に隣接する邑南町の今佐屋山遺跡^{いまさやま}では、国内最古級の6世紀後半及び12世紀頃の製鉄遺跡が確認されている。北側の江の川下流部、江津市松川町に位置する森原下ノ原遺跡^{もりぼらしものほら}では、室町時代の鍛冶炉跡が検出され、同市桜江町（江津市との合併前は、本町と同じ邑智郡に属していた。）でも室町時代の製鉄遺跡が確認されている。

したがって、これら地域と同じ江の川流域で、かつ、近接していることから、本町においても中世、あるいはそれ以前からたたら製鉄が行われていた可能性が高い。

また、石見地方を含む中国山地一帯は、砂鉄の採集が容易な花崗岩の風化した土壌であり、本町においては鉄穴流し（第1章第2節「1 地形〈先行河川としての江の川〉」を参照）に適した無数に存在する谷間の地形、江の川の支流、薪炭材となる豊富な森林が存在することから、伝統的にたたら製鉄やその燃料となる炭焼きが盛んに行われてきた。

それを裏づけるように、本町にはたたら跡だけでなく、「鉦」の付く地名「鉦谷」（九日市）や名字が継承されている。さらに、たたら跡の近くなどでは、鉄穴流しにより形成されたと想定される農地やその跡（平坦地）が確認できる。江戸時代後半から明治にかけてのたたら製鉄の最盛期には、全国のおよそ8割以上の和鋼・和鉄が、中国山地一帯で生産されていた。

特に、本町は、江の川の舟運により、砂鉄や薪炭材が域外からも容易に搬入され、また、神戸川上流部（飯南町）などで生産された鉄が街道を通じ、中継地・浜原などに持ち込まれていたことから、浜原、粕渕（小原）を中心に特徴的なたたら製鉄の文化圏（人や物の移動・交流、町の形成、建築文化など）を構成していた。一方、耕地面積が限られた中で、江の川の氾濫など、災害に度々見舞われてきた本町において、たたら製鉄は生きるための重要な生業でもあった。

たたら製鉄は、明治時代に導入された近代製鉄により衰退したが、燃料である炭をつくる窯（炭窯）は、1960年代のエネルギー革命（石油、ガスの普及）まで数多く存在し、各所で炭焼きが行われていた。その窯跡は、山中に埋もれた存在となっているが、草木の中に確認できるものもある。

このように本町は、千年以上前から明治時代まで行われてきたたたら製鉄の歴史を、たたら跡や炭焼き窯跡、舟運や街道の歴史、そして地名などを通じてうかがい知ることができるまちである。併せて他地域におけるたたら製鉄の情報を得たり、遺跡や施設等をめぐったりすることで、中国山地一帯におけるたたら製鉄の隆盛なども学ぶことができる。

（3）山城跡と中世の記憶

美郷町は、古くより江の川の舟運（陰陽連絡等）の要衝、及び出雲国と石見国の接点として重要視され、さらに石見銀山が開発されると、その支配をめぐる戦いの最前線となった。こうしたことを裏づけるように、江の川沿いや主要な街道近くなどに多数の山城跡が位置し、また、戦国時代における尼子氏の陣所跡も確認されている。

江の川沿いに山城跡が多く所在するのは、交通の大動脈であった江の川の舟運を押さえるためであり、また、石見銀山をめぐるせめぎ合い、中国地方における覇権争いが背景としてあった。

特に、尼子氏と毛利氏の争いを物語るものとして、江の川に面する都賀西町民グラウンド西側の山地に位置する尼子氏陣所跡がある。天文9年(1540)、^{あまごあきひさ}尼子詮久(後に^{はるひさ}晴久と改名)は3万の軍勢を率いて毛利氏の居城である吉田郡山城を攻めたが城は落とせず、天文10年(1541)1月に撤退を開始した。その際、敗走する尼子勢が出雲国にある^{とだじょう}富田城(現在の島根県安来市広瀬町富田)に帰還するため、この陣所で兵をまとめ江の川を渡河した。その後、天文11年(1542)の大内氏、永禄5年(1562)の毛利氏による尼子攻めの際、逆に大内氏や毛利氏により使用された可能性もある。

このように本町では、江の川の舟運や街道の押さえ、尼子氏と毛利氏による戦国時代の攻防など、石見国中東部における中世の歴史を、山城や地名、伝承によりうかがい知ることができる。

(4) 江の川の文化的景観

美郷町では、江の川と河川沿いの街・集落、農地、山地・森林が一体となった文化的景観が、町域の江の川全体を通じて形づくられ、特に秋や春にかけては朝霧が稜線付近まで立ち上り、特有の環境となっている。この朝霧は朝昼の寒暖差が大きくなると江の川や山々から立ち上るものであり、幾つかの眺望の場からは、山々を埋め尽くす雲海として神秘的な景観を形づくり、文化的景観を彩ることになる。

こうした景観・環境は、本町にとどまらず、少なくとも隣接する下流部の川本町、上流部の三次市にも連続する。

本町においては、江の川沿いの農地や集落等の多くは河岸段丘に位置し、いずれも小規模であるが、河川水面に近い低地部(浜原、都賀本郷など)から高台(粕渕など)まで、地形・立地を巧みに活かし、洪水対策を積み重ねながら築かれている。また、背後に棚田が形づくられた地区(都賀本郷など)、旧三江線の線路や高架、そして鉄橋が景観を特徴づける場所も存在する。

前述の朝霧は、本町の特産品のお茶の栽培とも関係する。紫外線をほどよく遮り、渋みの成分である「カテキン」を押さえ、甘み成分の「テアニン」が多くなることで、「江の川銘茶」を育み、茶畑は限られた範囲ではあるが、文化的景観の要素ともなっている。

加えて、浜原では昭和28年(1953)に完成した重力式コンクリートダムが、12門の水門を整列させて河川を横切り、独特の景観となっている。浜原ダムで貯水された河川水の一部は、送水路(トンネルなど)を経て下流の明塚発電所に送られ、水力発電を行うことになり、これらは産業遺産でもある。

浜原ダムの上流、旧三江線潮駅付近には昭和31年(1956)に完成した潮発電所があり、ここには隣接する飯南町を流れる神戸川の来島ダム(昭和31年完成)で貯えられた水が、送水管で送られ動力となっている。さらに、その水は江の川に流され、浜原ダムに貯水することになり、こうした分水嶺を超えた水の供給により、明塚発電所の発電にも寄与している。

江の川を舞台としたアユ漁などは、この後の「10 川と山の食文化」で述べるが、^{やなりょう}築漁や火振り漁といった伝統的な漁が継承され、アユ釣りを含め風物詩にもなっている。

このように、江の川を軸に農地、集落、発電、農業、川漁、電力、鉄道の遺産、そして深い谷と緑、朝霧・雲海が共鳴し、山の景観の変化やアユ釣りなどが季節を彩る中、特有の文化的景観を形づくっている。

(5) 川と山の食文化

江の川は、交通の大動脈として地域の経済・生活を支えてきた歴史があるとともに、支流を含め現在に引き継がれた豊かな食の源泉でもある。また、周辺に広がる農地や山々も暮らしに恵みを与えてきた。

美郷町では、ウナギ、アユ、ウグイ、ハヤ、カニ（モクズガニ）などの伝統的な漁（築漁、火振り漁など）が継承され、山では山菜、キノコ、イノシシ（山くじら）が郷土色豊かな食をもたらしている。

これらのうち築漁は、有志でつくる^{だいわ}大和伝統漁業築保存組合により令和2年(2020)に復活され、火振り漁も江の川流域では唯一継承されている。

山くじらは、江戸時代後期に普及したイノシシ肉の隠語である。イノシシは農地を荒らす存在であるが、本町ではそれを逆手にとる発想で、かつ、伝統的に猟を行い食してきたこの地の歴史を再評価しつつ、肉や皮を地域資源・特産品「山くじら」として活用している。町としては、山くじらブランド振興や美郷バレー構想の推進、有害鳥獣対策などを行う美郷バレー課、及び「おおち山くじら研究所」を設立している。

また、三瓶山の火山灰と江の川が運ぶ肥沃な土壌とにより、茶の栽培などに適した地域として質の高い農産物を生産している。

これら食材は、四季折々の郷土料理としても活かされ、彼岸、節句、田植え・泥落とし、盆、稲刈り、祭、冬至、正月、とんどなどにおける行事食やその言い伝えが継承されている。こうした食文化を、美郷町食育推進協議会では『美郷町の四季の行事と郷土料理』（平成23年）としてまとめている。

このように本町は、江の川と山間の農地や山々の恵み、そして人々の生活の知恵により、川と山の多彩な食文化を体感し、食を楽しみ、学ぶことのできるまちである。

(6) 地域に息づく民俗芸能

美郷町では、神楽、花田植、シャギリ、楽打ち、はやしこうなどの民俗芸能が行われ、特に神楽は、町指定文化財となっている鐘馗（大和神楽団）、山伏（都賀西神楽保存会）、天の岩戸（都神楽団）があり、これらの他にも、都賀西子ども神楽、千原神楽団、忍原地頭所神楽団、乙原舞子連中により継承されている。神楽については、前述（第2章第2節「1 指定等文化財の概要」）のように、広域（浜田市、益田市、大田市、江津市、川本町、美郷町、邑南町、津和野町、吉賀町）で日本遺産に認定されている。

これらのうち、鐘馗は中国の故事と能の「鍾馗」、^{すきのおのみこと}素戔鳴尊と^{そみんしょうらい}蘇民将来（備後国風土記に記された人物）との「茅の輪」の故事が合体したものと*いわれ*ていわれ、演目における神は素戔鳴尊である。

山伏は、謡曲「安達ヶ原の鬼」と栃木県那須町の「殺生石」の伝説を基に構成された演目である。

天の岩戸は、古事記の上巻にある天の岩戸の物語を神楽化したものである。

また、かつて田植は、代かきから田植までを1日で行う行事で、わさ植と本田植に分かれていた。まず、小規模なわさ植を家内で行った後、大規模な本田植に移っていた。本田植になると、田主の統制のもとに田の神をまつり、太鼓や笛、ササラなどで歌いはやし作業を行っていた。これを花田植と呼ぶ。銀山領一帯の田植は小笠原流とされ、唄は近重流が用いられていたとされる。

別府地区の花田植は、かつて行われていた花田植を復活させたもので、平成18年(2006)

から3年に1度行われている。5月下旬、浴衣を着た太鼓打ちが田の周囲を囲み、笛や太鼓の音が響く中、早乙女が田植を行う。

シャギリ・楽打ち・はやしこうについては、沢谷地区の一部では、はやしこう、それ以外の旧邑智町地域ではシャギリ、旧大和村地域では楽打ちと呼ばれている。秋の例祭に浴衣に「たくり」と呼ばれる色とりどりの帯を背負い、太鼓を体の前に吊り下げ、それを笛等の拍子に合わせて叩きながら、行列して町を練り歩き、最後に各地域の神社に向かい奉納される。

このように本町では、石見地方に広がる神楽が盛んに演じられているとともに、農耕文化を形づくる花田植や秋祭りなども継承され、風物詩ともいえる伝統芸能を体感できるまちである。

(7) 継承されてきた信仰と固有の空間・風景

美郷町には、江の川沿いや石見銀山街道沿いを中心に、各所に寺社が立地し、人々の信仰の場となり、特に江の川沿い寺社の多くは、いざというときの避難の場にもなっている。

寺院の多くの宗派は浄土真宗であり、一部は曹洞宗もある。

浄土真宗で最大の寺院は粕渕の浄土寺で、江の川を見下ろす位置にある。この寺院は徳治元年(1306)に真海が、親鸞の高弟である兄の了海(関東六老僧)を請じて開山した山陰地方における浄土真宗発祥の寺院である。江戸時代には末寺100余りを擁した巨刹であり、現在も9,500㎡の境内を有している(浄土寺HPより)。

また、各所に立地する寺院の本堂や門、庫裡等、神社の鳥居や本殿や祠等、そして境内の石段や石垣、その他石造物などは、それぞれの地域・地区の信仰と風景を象徴する存在である。建造物(建物)の幾つかを紹介すると、浄土寺の四脚門は江戸時代前期の建築と伝えられ、乙原地区の山神社は銅ヶ丸鉾山の守護と盛行を祈って勧進されたものである。また、寺院の梵鐘などは、太平洋戦争中、金属回収令により多くが供出されたが、本町には喚鐘(梵鐘を小型にしたもの)が多数残されている。

その他の建造物も由来が明確でなくとも、それぞれの地区の歴史の証として、また、風景の形づくる重要な要素として存在している。

このように本町は、寺社をめぐることで、継承されてきた信仰に思いを馳せるとともに、江の川や山間と一体化した、それぞれに特性を有する固有の空間と風景を体感できるまちである。

(8) 樹木が彩る山間や川辺の風景と暮らし

美郷町は山間のまちで総面積の約9割が山林であり、山々には巨樹や特徴的な種類の樹木も根つき、境内地をはじめとした市街地・集落地においては貴重な樹木が守られてきた。

代表的なものとしては、サクラ、イロハモミジ、カツラ、スギ(大スギ)、カシノキ、ムクノキ、イチョウ、タブノキ、ヒヨクバエ、スダジイ、モミノキ、シャクナゲなどが知られている。

特にサクラの巨樹や並木などは多数あり、大切に守られ親しまれている。また、各所で紅葉めぐり(モミジ、イチョウ、カツラなど)ができる。

幾つかを紹介すると、浜原の江の川を見下ろす高台に位置する妙用寺の桜(妙用寺桜:県指定文化財)は、ヤマザクラとエドヒガンザクラの雑種で、推定樹齢500年以上と伝え

られ、樹高 30m、幹周 4 m の巨樹である。妙用寺では参道に咲くシダレザクラとモモの花も鮮やかに春を彩る。その後にはツツジが一斉に見頃を迎え、本堂の前のフジ棚も一見である。

九日市の「ふるさとおおち伝承館」の敷地には、前川ザクラ（町指定文化財）があり、樹齢約 120 年のシダレザクラは、前面の石見銀山街道（県道）に桜のトンネルを形づくる。ふるさとおおち伝承館は、江戸時代後期の面影を残す旧前川家住宅を活用したもので、サクラや街道とともに江戸時代の風情を感じさせる。

同じく九日市の山中にある花の谷の桜（県指定文化財）は、「天空のエドヒガン」とも呼ばれる山上の一本桜であり、樹齢は 500 年とも言われ、幹周は 5.56m に達する。花の谷にはシャクナゲの自生地もあり、その近くには、地元の有志により「シャクナゲパーク」がつくられ、4 月下旬には百数十本のシャクナゲが色鮮やかに咲き乱れ、「しゃくなげ祭り」が開催される。シャクナゲは、本町の町花でもある。

この近くの酒谷には、推定樹齢 500 年のオロチカツラ（県指定文化財）があり、ハート形の葉が特徴的で早春（3 月下旬頃）に新芽が赤くなり（見られるのは 3 日程度）、その後は黄金色、そして緑色、更には秋に黄葉し、落葉した葉はよい香りを放つ。大小 8 本の支幹からなり、見上げる姿がヤマタノオロチを想像させることから名づけられた。

これらのほかにも、旧 JR 三江線の潮駅前前の桜並木、沢谷三里桜街道、青木の一本桜（粕淵）、飯谷のシダレザクラ（上野）、浄土寺のサクラ（粕淵）、湯抱温泉街の桜、酒谷のもみじ街道などが知られている。

このように本町は、緑に包まれた自然環境の中に、地域を象徴する巨樹や並木、貴重な樹木が息づき、山間や川辺を彩り、所有者や地域住民により大切に守られ、観光資源としても活かされている。

（9）川と山が育む希少な生きものと名勝地

美郷町は緑に囲まれ、江の川と数多くの支流が流れるなど、生きもの（動植物）のすむ良好な環境を備えており、その中ではキイロヤマトンボ、コエゾゼミ、ミズカモグラ、エビネ、オキナグサなどの希少な動植物（絶滅危惧種）も生息・生育している（『改訂しまねレッドデータブック 2013 植物編・2014 動物編』に掲載）。

また、本町の野山には、絶滅危惧種を含め多種多様な動物が生息している。その中にはイノシシ、ツキノワグマ、シカ、サル、キツネ、モグラ、カラスなどの有害鳥獣も生息しており、適正な有害鳥獣対策を行いつつ、一方で三瓶山の山麓付近は鳥獣保護区（県）に指定し、保護対策を行っている。また、イノシシについては、「8 川と山の食文化」で記述しているように、「山くじら」として活用を図っている。

江の川やその支流では、アユ、ウナギ、カワムツ、オヤニラミ、ズナガニゴイ、アブラボテなどが同一水系に生息しており、多様な魚類相がみられる。また、鳥類ではカワセミ、ヤマセミ等、爬虫類ではニホンイシガメ等、両生類ではオオサンショウウオ、カジカガエル等がみられるなど、多様な動物が生息している。

これらのうちオオサンショウウオは、サンショウウオの仲間の最大種であり、美郷町全域（河川等）を対象として特別天然記念物に指定されている。全長は 120 cm に達するものもあり、頭部が大きく胴は太く、両体側にヒダがある。乳白色の粘液を出し、これが山椒に似た香りがすることから、この名が付いたとされる。島根県内では美郷町、邑南町で分

布密度が高く、これらの地域では「ハンザケ」とも呼ばれている。

さらに、本町では、江の川の支流が幾筋も流れ、それらはいずれも小河川であるが、各所に滝や溪流・溪谷が所在し、川と山（地形と緑）が一体となった小さな名勝地（自然の造形美）を形づくっている。一方で江の川と周囲の山並みなどは、大きな名勝地といえる。

このように本町は、山と川に多種多様な生きものが生息・生育し、滝・溪谷や緑・花の自然の造形を見たり、鳴き声を聞いたり、一部は触れたりすることができ、さらにアユやウナギ、イノシシなどは食文化として体感できるまちである。